

世界トップ10に入る日本の野菜・果実生産

強い農家 野菜にヒント

契約栽培実入り安定

日本の農業は、産業として「弱い」と言われてきたが、それは主食であるコメの話。野菜やくだものなどは、消費者のニーズに応えて、おいしさや安さを追求する「強い」農家が育っている。生産調整(減反)を廃止するコメづくりも、そんな強い担い手が育つかが再生のカギをにぎる。



レタス栽培では珍しいビニールハウスを使い、年3回の収穫を可能にした北部農園の上田教二会長(熊本市)

有明海に面した熊本県玉名市の干拓地に、レタスのビニールハウス500棟が広がる。11月下旬、レタスが次々に段ボールに詰められ、運び出されていく。今年「3回目」の収穫だ。

「農業はもうかる産業はない」。農業生産法人「北部農園」の上田教二会長(66)は話す。売上高8億円、従業員70人。キャベツなどもつくるが、売り上げの7割はレタス。20年ほど前から

付加価値率は、農家の販売収入から経営費や人件費、利子などを引いた金額を販売収入で割ったもの

■コメと野菜の農業はこんなに違う

	コメ	野菜
産出額 (11年)	1兆8500億円	2兆1300億円
輸出額 (12年)	7億円	20億円
関税率	778%	2.5~8.5%
自給率 (12年度、カロリーベース)	97%	75%
耕地10アあたりの農業所得 (11年)	2万5千円	12万2千円
付加価値率(11年)	26%	42%

ら農家が手放した土地を借りて規模拡大を進め、耕作面積は約80%に広がった。レタス栽培は年1~2回が一般的だ。ところが、この農園では年に3回つく

買価格を決めるので、栽培に専念できる。上田会長は言う。「補助金は1円ももらっていない。つくれるだけの作物を

コメ業界、競争に備え

実際、生産量では世界のトップ10に入る野菜や果実は多い。国連食糧農業機関(FAO)によると、11年の生産量は、タマネギは2位、ホウレンソウは3位、レタスは6位だ。野菜の場合、13カ国・地域と結ぶ通商協定では、多くが関税ゼロ。それでも、野菜の自給率は8割近い。農家が規模拡大によるコスト削減や契約栽培などに取り組み、競争力を高めてきたからだ。政府は、コメ価格が下が

これから本格的な競争が始まるコメにも、動きは出てきた。東北の大規模農家が秋田県大潟村で発足させた「東日本コメ産業生産者連合会」だ。農家のもうけがより増えるよう、外食や加工食品業界などの販路を広げるねらいだ。各地の農家が田植え機やコンバインを共同利用したり、肥料や農薬を一緒に購入したりして、生産費も減らすという。社長を務める大潟村の農家・涌井徹さん(65)は「野菜や果物の農家は品質向上と経費削減で頑張ってきた。消費者の期待にこたえるには、コメ農家も同じような努力が必要だ」と話す。(長崎潤一郎、古谷祐伸)

主な野菜や果実の生産量は世界のトップ10に入る 2011年のFAO統計

	タマネギ (ネギ含む)	2位	54万9500
	ホウレンソウ	3	26万3500
	ミカン	4	92万8200
	レタス	6	54万2400
	キャベツ	6	137万5000
	イチゴ	7	17万7300
	ナス	8	32万2400
	キュウリ	9	58万4600
	キウイ	9	2万6100
	コメ	12	840万2000